公式訪問先記録

2025年１月19日

18時00分～　サンティパーブ高校寮　卒寮生交流会
報告者：佐藤 郷、大西 香奈

サンティパーブ高校寮の卒寮生20名との交流会を行い、文化や食事の違いなどの会話を楽しみながら、日本食をいただきました。パクチーが苦手な日本人が多いのと同様に、ラオスの方は刺身（生魚）に抵抗感を持たれていましたし、そばを麺つゆではなくとんかつソースに絡ませて食べたほうがおいしいと言いながら食されるなど、食文化の違いを感じました。

また、「いっせーのせゲーム（※）」では、ラオ語で数字を覚えるのに必死な私たちと、ルールや戦略を覚えるのに必死な卒寮生の戦いが繰り広げられ、歓喜の声が飛び交う大盛況となりました。最後は、敗者への罰ゲームとして用意された苦いお茶で、卒寮生のティーさんとゲームの発案者である中村さんが仲良く乾杯をし、より一体感が高まりました。

卒寮生の皆さんが口をそろえて言ってくださったことは、「自分たちはサンティパーブ高校寮で過ごせたことに大変感謝をしており、次は自分たちが恩返しする立場だと認識している」という思いでした。実際に、卒業後に医療や教育などの職に就き、ラオスで暮らす人々のために尽力をされている方も多く、感銘を受けました。

卒寮生からいただいたＣＳＡに対する感謝の意と、高校寮での学びを次の世代につなげたいという行動を拝見し、あらためてＣＳＡが取り組む支援の意義を感じた次第です。卒寮生のさらなる活躍を祈るとともに、今後も多くの学生がサンティパーブ高校寮で学び、仲間との絆を深め、世界に羽ばたいていけるよう、支援を続けていきたいと感じました。

卒寮生のみなさん、楽しいひと時をありがとうございました！

（※）「いっせーの」の掛け声にあわせ、「０～全プレイヤーの指の本数」のうちの任意の数字を言い、それと同時に任意の親指を立てます。立った親指の合計数が、指定した数と同じであったら、数字指定者は片手を下ろします。これを繰り返し、先に両手とも下ろせた者が勝者となります。今後、ラオス国内におけるこのゲームの流行は間違いないでしょう！？

2025年１月20日

１１時00分～12時00分　在ラオス日本国大使館

報告者：佐藤 郷、大西 香奈

在ラオス日本国大使館にて、田坂公使、古賀一等書記官と意見交換を行いました。

はじめに、今年は、日本とラオスの国際協力および外交70周年ということもあり、国家としてもさらなる投資や支援を検討している意向が報告されました。また、ラオスはＡＳＥＡＮ諸国の中で経済規模が極めて小さい国家であるが故に、一つの投資や支援によるインパクトが他国よりも大きいそうで、ＣＳＡの支援もその一助となっているとのお言葉をいただきました。

次に、ラオスの経済動向および教育事情についてご説明を受けました。

経済情勢については、国内市場が小さいこともあり、製造業を含めた海外企業の進出が少ない中で、隣接国でもある中国の投資は年々増加をしているそうです。ラオスは、メコン川の水流を活かした水力発電が盛んであることやロシア・ウクライナ戦争による石油不足の影響が大きかったこともあり、中国産のＥＶ自動車が急増したそうです。観光客も、2021年に中国とラオスを結ぶ新幹線の開通によって大きく増えているそうですし、複数の直行便がある韓国からの観光客も引き続き多くなっているとのことでした。

教育事情については、コロナ禍以降も経済悪化が続き、家計維持のために子供に労働をさせざるを得ない家庭が増え、小学校就学率は90％にとどまり、さらに最終学年への到達率は80％へと低下したそうです。加えて、高等教育・大学卒業後の雇用の受け皿も少なく待遇も魅力的ではないため、進学をせずに海外へ働きに出る若者が増えているそうです。結果として、労働人口が流出し、国内産業が成長しないという悪循環に陥っているため、国の教育予算を見直し、まずは教員の処遇改善と質の向上を図っていくことが急務であるとのことでした。

今後のラオスの成長に向け、引き続きＣＳＡを通じた教育支援に加え、ＩＴやＳＮＳを活用した観光業の活性化や縫製・コーヒー栽培などの産業育成に対する支援も必要と感じました。

2025年１月20日

14時00分～15時00分　難民を助ける会（ＡＡＲ）
報告者：鈴木 芳苗、白沢 幸希

午前中に地雷博物館と在ラオス日本国大使館を訪問した後、午後からビエンチャン市内にある難民を助ける会（ＡＡＲ）の事務所を訪問しました。ＡＡＲの事務所には岡山駐在代表の他にコーディネーターの堀内様、Bounchanh様がおり、快く迎え入れて頂きました。

冒頭、ＣＳＡを代表して北野団長から挨拶を行い、各自自己紹介を実施しました。その後、岡山駐在代表からご用意を頂いたパワーポイント資料を用いて、ＡＡＲが2000年から現在までラオスでどのような支援を実施してきたのかをご説明頂きました。

ＡＡＲはラオスにおいては障がい者支援を一貫して実施されており、2000年からの10年間は障がい者向けの車いすを作る事業の支援、2011年からは障がい者の人達の収入を支える支援を実施されているとのことでした。

特に車いすの事業については現地で調達可能な鉄や自転車のタイヤ等を用いて製作されており、製造業が乏しいと言われるラオスにおいて10年間で3000台の国産車いすを製造されてきたという実績があるとのことでした。

午前中に地雷博物館を訪問した件についても意見交換をしました。ベトナム戦争時代のクラスター爆弾による不発弾が完全に除去されておらず、現在も年に10件ほど被害者が発生する状況であり、被害にあわれた方に対して車いすは貴重な移動手段になっているようです。

最後にＣＳＡとＡＡＲ双方の課題として従来から支援の形が変わってきており、支援がどこに必要なのかが掴みづらくなってきているという話がありました。

今後もお互いに情報共有をさせて頂く事を約束してＡＡＲの訪問は終了しました。

2025年１月22日

10時30分～11時30分　ナン地区ナラオ村トンパンビライ小学校
報告者：鈴木 芳苗、白沢 幸希

ルアンパバーンから車で約１時間半、舗装されていない道を大型貨物自動車が行き交う中、車に揺られ、小さな村にある小学校に到着しました。生徒たちが校舎の前に男女で分かれて整列し、歓迎してくれました。この小学校には約100名の生徒が在籍しており、テスト期間明けの休みの日にもかかわらず、多くの生徒が出迎えてくれました。

この学校は2002年にＣＳＡから引き渡され、今回の訪問は2011年以来14年ぶりの２度目となりました。引き渡しから20年以上が経過し、建物や机、椅子の老朽化が目立ちましたが、同時にこの場所で教育がしっかりと育まれていることを感じ取ることができました。

訪問の始めに職員室で先生方から小学校の現状を伺い、その後、外でセレモニーが行われました。ＣＳＡからサッカーボール、バレーボール、ノート、ペンを寄贈しました。

子どもたちは目を輝かせながら「コプチャイライライ」と言って受け取っていました。

交流の時間では、石や動物の糞が落ちている整備されていない校庭にも関わらず、裸足の子もいる中、寄贈した新品のボールを夢中で追いかけていました。その活気に、ＣＳＡメンバーもついていくのがやっとでした。

また、校舎の前では日本文化の折り紙で遊びました。子どもたちには折るのは少し難しかったようで、出来上がったもので楽しんでいました。

交流をするうちに緊張感はなくなり、すっかり打ち解けられました。子どもたちの素直に喜ぶ笑顔やはしゃぐ姿に癒されました。

短い時間でしたが、元気いっぱいの子どもたちとの交流はとてもいい思い出となりました。

今後もこの小学校で多くの子どもたちが学び、成長していく元気な姿が想像できました。

このような場を継続的に提供し続けるためにも、引き続きＣＳＡ支援活動の輪を広げていく重要性を一同再認識した訪問となりました。

2025年１月22日

14時00分～15時00分　ルアンパバーン県教育・スポーツ局

報告者：中村 健太、奈良 泰七

ルアンパバーン県教育・スポーツ局を訪問し、ソウルデス局長やサンティパープ高校の教員の方々と、ＣＳＡの活動、教育問題についての意見交換を行った。

まずは、北野団長が代表挨拶を行い、その後、局長からこれまでの支援に対するお礼の言葉をいただいた。とくにサンティパープ高校寮の支援については、通学や家計の問題で、通常であれば就学することができなかった優秀な子どもたちを受け入れ、質の高い教育を受けさせることができるようになった、と述べられていた。

ラオスの教育の現状については、コロナ禍以降、家計を支えるため子どもが就労し、ドロップアウトする数が増えたという。とくに中学生くらいの年代になると顕著だといい、そのような子どもたちが学業に戻れるような対策をとる必要があるようだった。また、教育分野に割ける国家予算がどうしても足りず、政府の支援が行き届かないところに協力してほしい、とのお話しもいただいた。

ＣＳＡが行っている支援の意義と必要性を感じられる訪問となった。

2025年１月23日

10時00分～11時30分　サンティパープ高校寮
報告者：佐藤 郷、大西 香奈

高校に到着後、寮の中に案内され、そこでたくさんの寮生たちが集まって私たちを歓迎してくれました。まず、寮を担当する先生から１学期（９月～１月）の間、寮生が取り組んだ勉強、スポーツ、文化活動について報告を受けました。寮生は学校の中でも成績上位者が多く、またラオス伝統舞踊（部活動）では大会で２位になるなど、文武両道で優秀な子供たちが多いことに驚きました。寮は国内の様々な県から集まって共同生活しているため文化や考え方が異なりますが、とても厳格なルール（18個もあります）を全員が守ることで、規則正しく生活しているそうです。ただ、厳しいルールはありますが、授業以外でも先生や先輩が後輩たちに勉強を教えるなど、楽しく寮生活を送っていると聞き、少し安心しました。

次に寮生活で感じていること、困っていること等について寮生に直接話を聞いてみたところ、はじめはなかなか手が上がりませんでしたが、３人の寮生から「雨のときに排水が間に合わなくて床が濡れて困っている」、「部活で必要な民族衣装がとても高価で負担が大きい」、「インターネットが繋がらない」という意見をもらいました。先生がいる中で言いにくいところがあったかもしれませんが、寮生からは切実な思いが伝わりました。

締めくくりとして校長先生から、今回のＣＳＡの訪問を歓迎するとともに、引き続き支援、指導をもらいながら寮の歴史を繋いでいきたいというお言葉いただきました。それを受け、山崎事務局長からは、勉強、スポーツ、文化活動で優秀な成績を収められていることを嬉しく思うとともに、いただいた要望に対して可能な限り応えられるよう検討する、と伝えられました。

最後に、寮生によるラオスの伝統舞踊「歓迎の舞」の披露と、バーシーセレモニー（健康と繁栄を祈る仏教儀式）が行われました。寮生のみなさんの純粋で思いやりのある人柄とラオスの文化に触れ、ラオスの魅力が詰まった時間でした。寮生のみなさん、先生方、ありがとうございました！

2025年１月24日

１１時00分～12時00分　在タイ日本国大使館
報告者：玉木 哲史、砂長 勉

在タイ日本国大使館を訪問し、中川一等書記官、鈴木二等書記官、宮田二等書記官に受け入れ対応いただいた。大使館は在留邦人の数に応じて規模が大きくなるが、タイには約2,000社の日本企業が拠点を置き、中国、アメリカに次ぐ約７万人の在留邦人がいることから大使館の規模も大きなものとなっている。尚、宮田二等書記官は、以前三菱自動車の労働組合で働かれていた経緯があり、労働組合の活動についても深くご理解いただいていた。

訪問においては冒頭、北野団長より受け入れに対する御礼を伝え、訪問団の自己紹介を行った後、山崎事務局長より今回のワーキング・スタディー・ツアーの日程概要やＣＳＡ活動状況についての報告を行った。大使館側からは、鈴木二等書記官より訪問に対する御礼の言葉を頂いた後、中川一等書記官よりタイの国内情勢や政治経済、現在の労働環境における課題について説明いただいた。

タイでは昨年、内閣人事の問題で解職された前首相に替わり、タクシン元首相の娘である37歳の女性が最年少で新首相に選出されている。国内情勢としては、他のＡＳＥＡＮ諸国に比べ経済成長が鈍化し、少子高齢化や都市部と地方との経済格差拡大、家計債務問題の顕在化等を抱えている。特に家計債務問題については、消費者ローンの割合が高く、政府としても審査の厳格化等の対策を行っているとのことであった。全体としてサービス消費が落ち込み景況感としては悪い状態が続いており、そこに中国系資本が入ってきていることからタイ国内での日系企業の景況としてはさらに悪くなっている。タイ政府としても自動車ローンに対する期限付きの利子の免除やデジタルバーツ給付、最低賃金の引上げなどの経済活性化施策を進めているものの、予算等の問題から進捗は芳しくないとのこと。日本からのＯＤＡについては、以前は無償のインフラ支援等が多かったものの直近では有償支援や、環境や渋滞緩和に関する技術的、ソフト的な支援も増えている傾向にある。最後にＮＧＯ団体に望まれるニーズについて尋ねたところ、大使館側からは増えている移民への生活や教育の支援が挙げられ、訪問団として支援に向けて引き続きの情報交換等連携をお願いして訪問を終了した。

2025年１月24日

14時00分～15時00分　国際労働財団ＪＩＬＡＦ（バンコク事務所）
報告者：砂長 勉、玉木 哲史

2025ワーキング・スタディ・ツアー最後の訪問先、ＪＩＬＡＦバンコク事務所を訪問。
冒頭、北野団長がＣＳＡを代表し挨拶を行った後、ＪＩＬＡＦとＪＩＬＡＦの活動そしてＪＩＬＡＦバンコク事務所の活動について所長の関口氏より説明をいただいた。
国際労働財団（ＪＩＬＡＦ）は1989年に連合によって設立され、労働分野における国際交流と協力を推進するＮＧＯ・ＮＰＯ組織であり、各国の労働運動の強化・発展、健全な社会・経済開発に貢献し、各国との友好関係を構築しています。

ＪＩＬＡＦバンコク事務所は、タイを拠点に、タイ、ネパール、バングラディッシュ、ラオス、カンボジア、ベトナム、スリランカで活動をしています。主な活動は、日本の労働事情や労使関係の経験を基に、発展途上国の労働組合の指導者の育成を支援する「招へい事業」と建設的な労使関係構築に向けたセミナーの開催で、労働組合の強化を通じ社会経済の発展に貢献する「現地支援事業」を展開している。
特に、現地支援事業では子供たちの未来のための学校プロジェクト、インフォーマルセクター労働者への草の根支援事業に力を入れて展開している。

関口氏からは、ラオス国内には国連機関以外で入っているＮＧＯは限られている。特に教育問題に関しては取り組みやすい分野。いろいろ活動を拡大するよりは、一つに絞り込むことはインパクトがある。国の教育が良くならないと社会経済はよくならないのは明白である。ＣＳＡの今までの実績は大きいと思うので、国や他のＮＧＯとの連携も検討して良いと考えますと支援の方向についてアドバイスをいただきました。
加えて、ＣＳＡが建設した学校のある場所とＪＩＬＡＦが活動をしている場所は少し離れている。ＪＩＬＡＦは問題を抱えている地域に入っているので、今後小学校を建設する時には、同じ地域を検討いただき新しい連携ができればと今後の連携についてもヒントをいただきました。

その後質疑応答等を行い、今後の活動の検討に向けたヒントを得る貴重な意見交換となりました。